

# 『ユリシーズ』の中の W.B.イエイツ

道木 一弘

エルマンの伝記によって、ジョイスとイエイツ(W. B. Yeats 1865-1939)の出会いは半ば伝説となっている。1902年10月初旬、二人はダブリン市内のカフェで出会い、アイルランドにおける創作活動の未来について語り合った。歯に衣着せぬジョイスのもの言いに対してイエイツは終始守勢に立たされ、挙句の果てにイエイツの年齢を尋ねたジョイスは、その答えを聞くと「会うのが遅すぎました。あなたは年を取り過ぎている」と言い放った。既にアイルランドの国民的詩人として名声を得ていたイエイツに己の才能を頼む若きジョイスが対峙した印象的な場面である。ただし、この有名なエピソードはイエイツ自身が書き残した手記が基になっており、それを補完するようなジョイスの側の直接的な記録は残っていない。従って穿った見方をすれば、この場面がイエイツの創作である可能性もある。だが、ここでは彼の言葉を先ずは受け入れることで、本論の導入としたい。以下に当該の一節を引用する。

Presently he [Joyce] got up to go, and, as he was going out, he said, 'I am twenty. How old are you?' I told him, but I am afraid I said I was a year younger than I am. He said with a sigh, 'I thought as much. I have met you too late. You are too old.'

(Ellmann, *Joyce* 103)

注目したいのは、イエイツが、「私は自分の年を一歳若く言った」という部分である。当時彼は三十七歳であったから、三十六歳と言ったことになる。もちろん、当時二十歳であったジョイスにとって、一年の違いは意味を持たなかったであろう。いずれにせよイエイツが「年を取り過ぎていた」ことに変わりはないのだ。だが、このたわいもない嘘によって、実に興味深いことが起きた。1902年10月においてそれぞれ三十六歳と二十歳となった二人の年齢上の関係は、二年後の1904年6月16日、すなわちブルームズ・デー (Bloom's Day) において、ブルームとスティーヴンの年齢となる三十八歳と二十二歳に重なったのである。<sup>1</sup>

これは偶然の結果だろうか。あるいは、ジョイスがイエイツの言葉を文字どおりに受け取って、または嘘と知りながら、それをブルームに当てはめたのだろうか。上述したように、ジョイスはイエイツとの出会いに関して、何ら具体的な記述を残していない。しかし、ジョイスが自分の人生を様々なかたちで作品化したことを考慮するなら、このような年齢の一致を偶然と見るべきではないだろう。換言すれば、この年齢の一致は、イエイツの残した手記の信憑性を裏付けると同時に、ジョイスがブルームという作中人物を生み出すに際し、イエイツをそのモデルの一人として選んだ一つの証左になりうるのである。

あらためて述べるまでもなく、『ユリシーズ』の作品世界に、イエイツ本人が登場することはない。1904年当時、イエイツはアイルランド国民演劇協会のロンドン公演とアベイ座設立準備のために奔走していた。実際、彼がロンドンの住居から編集者に宛てた6月16日付けの手紙も残っている (Kelly, *Letters* III 605)。従って、言葉と語りにおいて多様な実験を試みながらも、リアリズムの枠組を維持する『ユリシーズ』にイエイツが出て来ないのは当然かもしれない。

だが、イエイツはこの作品に少なからぬ「気配」を感じさせる。ブルームとの年齢の一致はその一つである。また、周知のように、第一挿話前半でスティーヴンが引用する詩句はイエイツの戯曲『キャスリーン伯爵夫人』(*The Countess Cathleen* 1899) から取られたものであり、また彼が遭遇するミルク売りの老婆は同じくイエイツの戯曲『フーリハンの娘キャスリーン』(*Cathleen ni Houlihan* 1902) と係わっている。しかも、同名の女性をタイトルに含むこの二つの戯曲は興味深い歴史的背景も共有している。初演時において、イエイツがキャスリーン役にモード・ゴーン(Maud Gonne 1866-1953) を想定したこと、それぞれの初演の年にボーア戦争(The Boer War 1899-1902) が始まり終わったこと、ゴーンはボーア戦争に一貫して強く反対したこと、そしてジョイス自身は『キャスリーン伯爵夫人』を絶賛し、『フーリハンの娘キャスリーン』に失望したことである。以下、ジョイスとイエイツの係わりを再考しながら、二人の出会いが『ユリシーズ』の三人の主人公、とりわけブルームを生み出す上で如何なる意味を持ったのかを考察したい。

『キャスリーン伯爵夫人』はダブリンでの初演に際し、観客の激しい野次と反発を引き起こした。観客は、この劇の中でアイルランド農民が「無知で迷信深い」と描かれる一方、アングロ・アイリッシュ地主階級が理想化され過ぎていると感じたのである。これに対して、当時十七歳でダブリン大学の学生であったジョイスは、この劇がアイルランド農民の精神的後進性を的確に描いていると高く評価し、大きな拍手を送った。彼はまた劇中で歌われる詩“Who Goes with Fergus?”にも強い感銘を受け、それを「世界で最高の抒情詩」(Ellmann, *Joyce* 67) と書き、『ユリシーズ』の中でもこの詩の一部を引用したのである。

[Mulligan's] head vanished but the drone of his descending  
voice boomed out of the stairhead:

— *And no more turn aside and brood*

*Upon love's bitter mystery*

*For Fergus rules the brazen cars.* (1. 237-41)

詩を口ずさむのはスティーヴンの敵対者バック・マリガンであるが、それは一時的にスティーヴンを死んだ母のトラウマから解放する。だが初期のイエイツの詩が醸し出すケルトの神々の世界は、死んだ母及び彼自身をカトリック教会の呪縛から解放するには不十分なだけでなく、“Love's bitter mystery” という言葉は *Amor matris* (母の愛) というラテン語を彼に想起させるのだ。この言葉の持つ文法的な曖昧性は母と息子間に生じる相互の束縛を意味し、スティーヴンは最後までそこから自由になることができないのである。換言すれば、ジョイスはイエイツの詩句を、死んだ母のトラウマとカトリックの呪縛に苦しむ青年詩人の精神の有り様を表象する言葉として位置付けたのである。<sup>2</sup>

『キャスリーン伯爵夫人』以降、アイルランド文学座がアイルランド語によるより愛国的性質の強い演劇を上演するにつれ、ジョイスはイエイツに失望するようになる。周知のように、1901年に発表された“The Day of the Rabblement” というエッセイで、ジョイスはイエイツの態度を日和見主義と断定、それを“treacherous instinct of adaptability” (*Critical Writings* 71) と呼んで辛辣に批判したのであった。興味深いのは、イエイツが、ほぼ一年後の1902年11月15日付けのジョイスに送った手紙で、この批判に反論を行ったことである。

The qualities that make a man succeed do not show in his work, often, for quite a long time. They are much less qualities of talent than qualities of character — faith (of this you have probably enough), patience, adaptability (without this one learns nothing), and a gift for growing by experience and this is perhaps rarest of all. (Kelly, *Letters* II 477)

父親のような (paternalistic) 口調で、イエイツは若きジョイスに自らの才能を過信することへの警告を与える。とりわけ、「順応性」(adaptability) がなければ人は何も学ぶことができないという彼の主張は、彼を「裏切り者」と呼んだ若き詩人の辛辣な批判に対するイエイツの自己弁護となっている。その一方で、イエイツは同じ手紙の中で、ジョイスに対して如何なる援助も惜しまないとも述べ、事実、1902年12月、ジョイスがパリへ向かう途上ロンドンにイエイツを訪ねた時、イエイツは律義にも早朝六時に自ら駅でこの若き詩人を迎え、アーサー・シモンズ始めロンドンの文壇の面々に彼を紹介したのであった。また、ずっと後になって、ジョイス一家が第一次大戦勃発によりチューリッヒで生活費に困窮した際、イエイツはジョイスが英国王室文学基金の助成金を得られるように尽力したのである。イエイツのジョイスに対するこうした善意に基づく父親的態度 (paternalism) はブルームのステイーヴンに対するそれを思わせるのだが、この点については後で述べる。

『ユリシーズ』では、ジョイスのイエイツへの失望は、第一挿話でのステイーヴンのミルク売りの老婆に対する猜疑心というかたちで表われることになる。彼はこの老婆にアイルランド伝説の老婆 “Poor Old Woman” を重ねるのだ。この「哀れな老婆」こそ、イエイツの戯曲『フーリハンの

娘キャスリーン』において若者たちを反英闘争へと駆り立て、その「血の犠牲」と引き換えに永遠の名誉を約束する急進的ナショナリズムの象徴的存在なのである。Terence Brown は次のように述べている。

Yet even in 1902 it was for some a disturbing portent and for others a work of prophetic Irish feeling, which, for the only time in his life, made Yeats a genuinely national figure. (136)

戯曲の露骨な愛国的メッセージ故に、それは当時のダブリンの観客らに好意的に受け入れられ、イエイツをして当時の急進的ナショナリズムを体現する存在としたのであった。ブラウンはさらにこの戯曲が初演されたタイミングを重視する。初演一年前の1901年、ヴィクトリア女王が亡くなり、時を同じくして、南アフリカのボーア戦争ではイギリス軍が予期せぬ敗北を喫し、さらに強制収容所でのボーア女性に対する残虐行為が明らかになり、イギリスは国際的な非難を浴びていた。従って、劇の最後で「哀れな老婆」が若い女性に姿を変え、女王のように歩く(“the walk of a queen”)時、それは大英帝国の凋落とアイルランドの再生を含意し得たのである。つまり、好むと好まざるとに拘わらず、イエイツの戯曲は急進的ナショナリズムのプロパガンダとして機能したのであり、故にスティーヴンが「哀れな老婆」に向けた猜疑の目は、イエイツ自身に対するジョイスの猜疑心、あるいは先達の詩人がナショナリズムに巻き込まれることへの懸念を反映すると思われるのである。

ジョイスの懸念とは対照的に、モード・ゴーンはイエイツのアイルランドの政治への関わりを歓迎し、戯曲の表題ともなったキャスリーン役を引

き受けた。かつてイエイツが『キャスリーン伯爵夫人』の献辞を彼女に捧げ、キャスリーン役を演じることを依頼した際、彼女がそれを断ったことを考慮するなら、今回は態度を百八十度変えたことになる。恐らくその理由は、筋金入りの愛国的活動家であったゴーンにとって最初の劇があまりに審美的かつエリート主義的であったのに対して、今度の劇は愛国的メッセージが明確で、彼女の嗜好に合致したためであろう。R. F. Foster は、「イエイツの知的ナショナリズムは、自らをゴーンに相応しい求婚者とするためにフェニアン的分離主義へと過激化した」(127)と述べている。イエイツにとってゴーンの存在は彼の審美的バランス感覚を狂わせる程の力を持っていたのであろう。

だが、『ユリシーズ』との関わりで注目したいのは、イエイツが知らなかったゴーンの二重生活 — フォスターの言葉を借りれば「非日常的」(surreal) 生活 — である。彼女はイエイツからの求婚を拒否する一方で、フランス人ジャーナリストで政治家でもあったルシアン・ミルヴォワ (Lucien Millevoye) の愛人となっていたのだ。ジョイスが、このイエイツとゴーンさらに彼女とミルヴォワの関係について、どの程度知り得ていたのかは想像の域を出ない。1902年、ジョイスが初めてパリへ渡った時、彼はゴーンに会う機会があったが、結局会わず仕舞いであった。<sup>3</sup> しかし、『ユリシーズ』執筆の頃までには、三者の関係は彼の関心を引き、とりわけゴーンの政治的及び性的行いがジョイスのイマジネーションに少なからず刺激を与えていたことは十分に考えられるのである。実際、『ユリシーズ』第三挿話で、スティーヴンがパリでフェニアンの活動家ケヴィン・イーガンと話した場面を想起する件で、イーガンはゴーンとミルヴォワの名を挙げ、二人を “lascivious people” (3. 238) 「好色な連中」と呼んでいる。

ゴーンはミルヴォワとの間に、一人の息子と一人の娘があった。ジョージとイーズルトである。だが、ジョージは二歳になる前に亡くなり、ゴーンは大きなショックをうける。フォスターによれば、この時ジョージ・ラッセルが「子供は生まれ変わって再び彼女の元へ帰ってくる」と言って彼女を慰めたという。さらに、これを真に受けたゴーンは、ミルヴォワを死んだ子供が眠る教会墓地へ連れて行き、「この奇妙な状況でゴーンはミルヴォワの子を宿した」(117) というのである。

『ユリシーズ』においても、モリーとブルームの間に、息子のルーディと娘のミリーがいる。だが、ルーディは生後十一日で亡くなり、その死は夫婦の心の傷となって、作品を通して双方から繰り返し追憶される。ここで、モリーが第四挿話でブルームに質問し、その後しばしば言及される“metempsychosis”という言葉を想起することは無駄ではないだろう。言うまでもなくそれは輪廻転生、即ち魂が姿を変えて繰り返しこの世に回帰することを意味するからであり、そこに幼くして死んだ息子に対するモリーの執着を読み取ることが可能だからである。この言葉をめぐって批評家達は多様な解釈を試みてきたわけだが、上述したゴーンの奇妙な性行動を踏まえて考えれば、死んだ息子が生まれ変わって戻ってくることを信じようとした彼女の姿が、同じく夭逝した息子を忘れることができないモリー（あるいはブルーム）を造形する上でジョイスに何らかのインスピレーションを与えたと考えることは十分可能だろう。<sup>4</sup>

ゴーンの政治的活動については、ブルームが彼女の「ボア人支持運動」(Pro-Boer Movements) に関与したことに言及する件がある。

Where's old Tweedy's regiment? [...] There he is: royal Dublin



fusiliers. Redcoats. Too showy. That must be why the women go after them. Uniforms. Easier to enlist and drill. Maud Gonne's letter about taking them off O'Connell street at night: disgrace to our Irish capital. (5. 66-71)

ボーア戦争に断固反対の立場をとったゴーンは、イギリス軍によるアイルランドでの新兵徴募にも激しく抗議した。彼女自身は以下のように書き残している。

To make recruiting easier, the Army Authorities altered their rule of obliging the men to sleep in barracks, and O'Connell Street at night used to be full of Red coats walking with their girls. We got out leaflets on the shame of Irish girls consorting with the soldiers of the enemy of their country and used to distribute them to the couples in the streets, with the result that almost every night there were fights in O'Connell Street, for the brothers and the sweet hearts of *Inghinidhe a hEireann* used to come out also to prevent us being insulted by the English soldiers and the ordinary passers-by often took our side. (Jeffares 266-67)

ゴーンらの運動が引き金となって、オコンネル・ストリートでは毎晩イギリス兵とダブリン市民の間の小競り合いが絶えなかったという記述は、第十五挿話の最後で、泥酔したスティーヴンがイギリス兵に殴打され、それをブルームが介護する場面を彷彿とさせる。周知のように、この場面は

『ユリシーズ』の一つの山場であり、しばしば問題となる「精神的父性」について考える根拠となる部分である。ここでスティーヴンはいわ言のようにイエイツの詩“Who Goes with Fergus?”を口にし、その直後にブルームの眼前にルーディの幻影が現れる。換言すれば、この山場において、これまで述べてきた『ユリシーズ』におけるイエイツの三つの影響、あるいは「気配」、が一つに収斂するのだ。死んだ母のトラウマに苦しむスティーヴンを象徴する“love’s bitter mystery”、ブルームのスティーヴンに対する父親的態度 (paternalism)、そしてモリーとブルームの抱える死んだ息子への執着を象徴する“metempsychosis”である。従って、この場面はジョイスからイエイツへのオマージュとして読むことも可能であり、イエイツの先達詩人としての存在の大きさ、あるいは「精神的父性」を、ジョイスが自らの作品を介して認めた、文学史的にも注目すべき山場としても読むことができるのである。

この「山場」に先立つこと五年の1899年12月18日、ソールズベリー内閣の植民地大臣であり、ボーア戦争開戦の責任者でもあったジョゼフ・チェンバレンがトリニティー大学で名誉学位を受けるためにダブリンを訪問した際、ゴーンはジョン・オレアリーやジェイムズ・コノリーらと共にボーア人支持の集会を計画した。イエイツ自身は集会に参加することはなかったが、ゴーンに集会への支持を表明した次のような手紙を送っている。

I need hardly say that I am with you and the meeting over which you will preside in wishing victory for the just cause of the Boers. I am not English, and owe England no loyalty; but if I were I would still think with Tolstoy that there is no loyalty

that should make a man wish anything but victory to a just cause. (Kelly, *Letters* II 477)

官憲から集会を禁止されたゴーンは、この手紙の写しを複数の新聞社に配るのだが、実際にそれを新聞に掲載したのは『フリーマンズ・ジャーナル』一紙だけであったという。<sup>5</sup> フォスターは、「イエイツは集会に参加できなかったことを後悔することはなかっただろう、結局それは暴徒化し、コノリーの逮捕で終わったから」(223)と述べているが、『ユリシーズ』では、それをブルームが以下のように回想する。

That horsepoliceman the day Joe Chamberlain was given his degree in Trinity [...] His horse's hoofs clattering after us down Abbey street. Lucky I had the presence of mind to dive into Manning's or I was souped. (8.423-26)

例えば Vincent Cheng は、ブルームがこの暴動に積極的に関与したとするが (213, 227)、私は異を唱えたい。一つにはブルームの積極的関与を示すような一節が作品中に見出せないからであり、また一つにはブルームがボーア人支持運動に対して極めて批判的だからである。彼は、暴動に参加した者の多くがやがて政府の役人になるだろうと言い、南アフリカに派兵されるイギリス軍のかなりの部分をアイルランドからの志願兵や義勇兵が占めると考えるのである (8. 438-40)。実際、ジョイス自身、1907年にトリエステで行った講演の中で同様の指摘を行っている (*Critical Writings* 164)。従って、たとえブルームがゴーンらの運動に少なからぬ共感を持ったとしても、彼がその暴動に自ら加わったとは考えにくいので

ある。そして、ブルームのこの客観的で醒めた視点は、単にジョイスの視点の反映であるだけでなく、恐らくはイエイツの視点の反映でもあったはずである。上述したように、彼はゴーンに共感の意を表す手紙を送ったものの、実際に集会に参加することはなかったのである。また、イエイツの手紙を掲載した新聞社が『フリーマンズ・ジャーナル』ただ一社だった事実も、ブルームとイエイツの係わりを考える上で大変興味深い。言うまでもなく、それはブルームの勤め先だからであり、さらに J. H. Raleigh によれば、ジョイスはブルームが『フリーマンズ・ジャーナル』社で働き始めた年を 1902 年（ボア戦争の終わった年と同じ）とするメモを残しているからだ (4)。想像の域を出ないが、ブルームは就職先を探すに際し、イエイツの手紙を載せた新聞社を選んだと考えることもできるだろう。

もちろん、こうしたことを踏まえても、ブルームをイエイツに比較すること、ブルームのモデルがイエイツであると言うことに対しては違和感を禁じ得ないかもしれない。民族的、文化的、また社会的地位において、両者の差はあまりに大きいものに思われるからである。<sup>6</sup> しかし、イエイツが若きジョイスに宛てた手紙において示した父親的態度 (paternalism) を今一度吟味するなら、ジョイスは単にそのような態度に苛立ちを感じただけでなく、そこから『ユリシーズ』における新しいヒーロー像を生み出すインスピレーションを得たとも考えられる。手紙の中でイエイツは作家として成功するための素質として四つのことを挙げていた。「信念」(faith)、「忍耐」(patience)、「順応性」(adaptability)、そして「経験によって成長する能力」(a gift of growing by experience) である。最後にこの四つの素質に基づいてブルームの人物評価を行いたい。

先ず、信念について。妻の姦通に悩み、仕事の上でも冴えない中年男ブ

ブルームは一見信念という言葉とは縁がないように見える。しかし、『ユリシーズ』の根底にある非暴力あるいは反暴力のメッセージはブルームによって最もよく体現されている。彼が怒りを露にするのは第十二挿話でサイクロプスのナショナリストに反論する時だけである。従って、彼の非暴力の姿勢はある種の信念に基づくものと見なすこともできるであろう。イエイツ自身もゴーンの過激な政治的ナショナリズムには常に懐疑的であり、『フリーハンの娘キャスリーン』が無謀なイースター蜂起の遠因になったのではないかと後に自責の念に駆られたのである。

二つ目の忍耐は、彼が非暴力の姿勢を維持する上で不可欠な素質である。この素質が試されるのはモリーの姦通においてであり、小説の最後に置かれた彼女の長いモノログが明らかにするのは、ブルームが最終的にモリーと係わる他の男たちから彼女を取り戻すらしいこと、そして、その理由が彼の女性に対する非暴力的で精錬された振る舞いによるらしいということである。いかなる理由にせよ、妻の姦通を容認し、その結果彼女を再び回復するのであれば、ブルームに忍耐の勝利を認めざるを得ないだろう。ここに、ゴーンへの度重なる求婚が拒否されたにもかかわらず、彼女への愛と援助を生涯にわたって惜しむことのなかったイエイツの姿を重ねることも不可能ではないだろう。たとえイエイツが結婚というかたちで「勝利」を得ることはなかったとしても、ゴーンは間違いなくイエイツに絶対の信頼を寄せていたはずだからである。

三つ目は順応性である。上述したように、ジョイスはイエイツの言う順応性を大衆迎合的な日和見主義と批判した。しかし、ある意味でブルームはイエイツ以上に順応性に富んでいる。顕著な例は、早い時期でのユダヤ教からキリスト教への改宗であり、さらにモリーとの結婚に際してのプロテスタントからカトリックへの改宗である。また、モリーの相手役に、ポ

イランに替えてスティーヴンを自宅に招くのも順応性の一例とみなすことができるだろう。イエイツにおいては手厳しく批判された順応性であるが、ブルームにおいては文化的・社会的柔軟性としてむしろ評価することも可能であろう。

最後に、「経験によって成長する能力」については、ブルームのお気に入りのフレーズである “University of Life” (15. 840. 17. 556) 「人生の大学」という言葉を挙げたい。ブルームは大学の学位を持っていないが、多様な職業経験を持ち、広告取りとしてダブリン市中を徘徊しながら様々な経験をする。従って、「人生の大学」という言葉は、ブルームの世俗的知識と実践的な智慧を踏まえた彼の矜持を表す言葉であり、彼を現代のオデュセウスたらしめる言葉なのである。

こうして、ジョイスは先達詩人イエイツとの若き日の出会いを後の創作活動の中で様々なかたちで活用、変容させ、自らの作品の糧としたのである。『ユリシーズ』の三人の登場人物、とりわけブルームが誕生する上でイエイツのもつ役割は小さくなかったはずである。

## 注

- 1 『ユリシーズ』は1904年6月16日のダブリンを舞台としており、主人公ブルーム (Leopold Bloom) に因んで毎年この日をブルームズ・デーと呼ぶ。
- 2 リッツ (A. Walton Litz) はこの点について以下のように述べている：  
“[The passage taken from *Countess Cathleen*] becomes the signature tune of Stephen Dedalus’s inner life, reminding him of both the

imaginative power he seeks and the failure to communicate that clouds his life.” (81-89) を参照せよ。また、*Amor Matris* というラテン語の曖昧性が暗示するスティーヴンと母の間の心理的葛藤については、道木 62-63 を参照のこと。

- 3 Ellmann 112 及び、1903年2月21日付のジョイスからスタニスラオス宛の手紙 (*Joyce Letters II* 29) を参照のこと。
- 4 さらに、ブルームがモリーと娘ミリーと比較し、「モリー。ミリー。同じものを薄めたようなものだ」 (“Molly. Milly. Same thing watered down” (6. 87)) という時、そこに、1917年にイエイツがゴーンの娘イーズルトに求婚したことを重ねて見ることも可能ではないだろうか。
- 5 Kelly, *Letters II* 477 の注を参照せよ。また、この暴動についてのゴーン自身の視点については Jeffares 272-77 を参照のこと。
- 6 この点に関しては、オハイオ州立大学名誉教授 Morris Beja 氏より、ブルームとイエイツがダブリン高校 (The High School, Dublin) の同窓生であることを教えて頂いた。記して感謝を申し上げる。尚、この高校はかつてダブリン市内の Harcourt Street にあったが、現在は Rathgar (1971年に移設) にある。

## 引用文献

作品・手紙

Ellmann, Richard, ed. *James Joyce Letters II*. New York: The Viking Press, 1966.

Joyce, James. *Ulysses*. Ed. Hans Walter Gabler, et al. London: The Bodley

Head, 1986.

Kelly, John and Ronald Schuchard, eds. *The Collected Letters of W. B. Yeats*.

Vol. II. Oxford: Clarendon Press, 1997.

---. *The Collected Letters of W. B. Yeats*. Vol. III. Oxford: Clarendon Press, 1994.

Mason, Ellsworth and Richard Ellmann, eds. *James Joyce: The Critical Writings*. Ithaca: Cornell University Press, 1989.

評伝・研究論文等

Brown, Terence. *The Life of W. B. Yeats: A Critical Biography*. Oxford: Blackwell, 1999.

Cheng, Vincent. *Joyce, Race, and Empire*. Cambridge: Cambridge University Press, 1995.

Ellmann, Richard. *James Joyce*. 1959. New York: Oxford University Press, 1982.

Foster, R. F. *W. B. Yeats: A Life 1: The Apprentice Mage 1865-1914*. Oxford: Oxford University Press, 1997.

Gifford, Don and Robert J Seidman. *"Ulysses" Annotated: Notes for James Joyce's "Ulysses."* Rev. ed. Berkeley: University of California Press, 1988.

Jeffers, A. Norman and Anna MacBride White eds. *The Autobiography of Maud Gonne: A Servant of the Queen*. Chicago: University of Chicago Press, 1995.

Litz, A. Walton. "Love's Bitter Mystery": Joyce and Yeats," *Yeats Annual*. No. 7, 1990.



Raleigh, John Henry. *The Chronicle of Leopold and Molly Bloom: Ulysses as Narrative*. Berkeley: University of California Press, 1977.

道木一弘. 『物・語りの「ユリシーズ」 — ナラトロジカル・アプローチ』.  
東京：南雲堂, 2009.

(付記)

本論は *The Yeats Journal of Korea*, Vol. 37 (Spring 2012) に掲載された英語論文 “Yeats in Joyce’s *Ulysses*” を日本語に書き改め、加筆・修正したものである。また、本論は平成 23 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金 基盤研究 (C) 期間は 3 年）に基づく研究成果の一部である。